

**1月13日ゼミは開催します****古事記の謎**

—1月13日ゼミ紹介文:小川 孝一郎会員記—

◆古代史の勉強を始めた頃、不思議に思ったことの一つに、「天武天皇は『古事記』と『日本書紀』という二つの歴史書の編纂をほぼ同時期に命じた」ということがありました。

『古事記』はその序文によれば天武天皇の命を受けて作られたもので、和銅5年(712)に太安萬侶によって編纂されました。なお成立の経緯を述べたものは序文以外にはありません。一方勅撰の正史とされる『日本書紀』は、天武天皇が皇子の舎人親王に編纂を命じたもので、養老4年(720)に完成した『続日本紀』に書かれています。つまり、『古事記』と『日本書紀』の成立はほぼ同時期であり、しかも両書とも勅命により奏上された歴史書ということになります。従って『古事記』は『日本書紀』より8年ほど先に作られたということから現存する日本最古の歴史書であるとされています。

あまり古代史のことがよく分からない頃だったので、『日本書紀』と『古事記』はとてもよく似た内容の歴史書であると受け止めていたものですから、そのような同じものをなぜ天武天皇はほぼ同時期に作るよう指示をしたのかという疑問が頭から消えず、その理由を探そうといういろいろな本を読んでもみましたが、納得のいくような説明に巡り合うことはありませんでした。私が手にした古代史関連の書籍はどれもそのことに何ら疑問を呈することはなく、それが「史実であること」を前提として記述されていました。

◆しかし何故、同時期に同内容の歴史書が同時に成立し存在したのかという疑問が消えることはなく、天武天皇が同時期に二つの歴史書の編纂を命じたということが中々信じられませんでした。それが事実であるなら天武天皇なぜそのようなことをしたのか、目的は何かな

ど次々に疑問が湧いてきて、何とも腑に落ちない気持ちが続いておりました。そうこうするうちに、大和岩雄氏の『古事記成立考』(昭和50年)および『論集古事記の成立』(昭和52年)を知り、この二冊によって長年自分が抱いていた疑問はやはり誰も疑問に思っていたのだということを知りました。ちなみに大和岩雄氏はその後も精力的に古事記の成立に関する研究を続け、「古事記偽書説の周辺」・「古事記成立の謎を探る」・「古事記と天武天皇の謎」・「新版古事記成立考」等々の著書を上梓していますが、アマチュア史家であるが故か古代史学界からは相手にされず、専門家はその説を取り上げて論評するといったこともありませんでした。大和氏はそのことに納得がいかなかったようで、自らの著書の中で古代史学会に対する不満を縷々述べています。ちなみに私は大和氏の「古事記偽書説」については、賛否相半ばするといった受け止め方をしております。

◆さて「なぜ同時期に同内容の歴史書が同時に成立し存在したのか」という疑問は江戸時代からありました。一人の天皇からほぼ同時期に二つの勅撰歴史書の編纂が下命されるということは、常識的に考えてあり得ないことであろう。そうであるならば、どちらかが本物で、他方は偽書と考えざるを得ないというのが、このことに疑義を持つ人たちの共通認識であったようです。『日本書紀』は、編纂に関する経緯と完成時期について『続日本紀』に記述があり、その存在を証明しています。しかし『古事記』はその序文に成立の経緯が記されているだけで、他にそのことを証明するものはありません。このことからそもそも正史は『日本書紀』しか作られなかったのではなかろうかという見方が生じるのは当然であると思われる。そしてそうであるならば『古事記』はその存在が不明確な偽書だということになります。

この『古事記』の成立時期あるいは成立事由・内容等について疑問を投げかける声は江戸時代から今日まで絶えませんが、これが『古事記』偽書説です。

◆ところで「偽書」とはどのようなものなのでしょうか。「偽書」を定義すると、内容が仮託して作られたり、著者や書かれた時期などの由来が偽られたりしている書物・文書のことということになります。主として歴史学において、その文献の史的側面が問題とされる場合に用いられる語ですが、専門家によって偽書の疑いを提示されたことがあるものも含まれます。(単に内容に虚偽を含むだけの文書は偽書とは呼びません)

偽文書や偽書が作成される事情には、その当時の歴史的背景に由来することが多く、その目的は、主に有名な人物の名によってその著書の権威を高め、または自己の立場、主張を強化するために行うものと考えられます。ただし歴史書は直ちに真偽を判断できない難しさがあります。真偽の判定にあたっては、他文献との内容の相違や矛盾や、その書の成立時期についての検証などが重要になりますが、一般にこうした検討材料は非常に乏しく真偽の判断は決して容易ではありません。

◆《『古事記』偽書説》を唱える人たちは、『古事記』がこうした「偽書の定義」に当てはまると考え、それゆえに『『古事記』は偽書である』としています。これまでの《『古事記』偽書説》を調べてみると、本文・序文共々偽書だとする説もありますが、大部分は「序文」を偽書としています。本稿では江戸時代以降の主な《『古事記』偽書説》およびその反論に触れるとともに、特に『古事記』研究の専門家である三浦佑之氏の説を詳しく紹介します。以上。

## ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分。

### 総本宮：久留米水天宮にまつわる話あれこれ

— 壱 久留米水天宮のご祭神と縁起 —  
松石 賢治会員記

#### 1. はじめに

水難徐け・安産・子授けで有名な水天宮は、筑後：三潞郡(現：福岡県久留米市)の水天宮を総本宮とし、日本全国内はおろかハワイにまでもある神社である。



総本宮：久留米水天宮

名称に「水天宮」を含む宗教法人は27社存在する

が、関東地区では日本橋蛸殻町の水天宮がとくに有名である。

神職は代々真木家で、平家棟梁平知盛の孫：真木右忠<sup>いづみ</sup>なる者の子孫という。

神紋は椿。水天宮の社紋は、橘紋を修飾して椿紋に仕立てらしい。謎めいた神紋でもある。



「五文字」の神符は、徐災・安産・子どもの守護に靈験あるという。

また、川海で働く漁師・船乗りは水難を免れ、<sup>いかり</sup>碇その他、水中で失せ物にも靈験があるという。



久留米水天宮の神符

この民間信仰に支えられた特異な神社である水天宮にまつわる起源や縁起・歴史を、数回に分けて考察してみたいと思う。

## 2. 総本宮：久留米水天宮の鎮座地

### ①現在の鎮座地

久留米水天宮は、九州第一の大河である筑後川(当時は千歳川と呼ばれていた)の筑後：三潞郡(現：福岡県久留米市瀬下付近)流域に、今は鎮座する。

この筑後川は阿蘇山を源流とし、豊後・肥後の山々の水を日田盆地で集め、夜明狭谷から筑後平野に流れ落ち、耳納山麓の巨瀬川など支流を集めながら西へ緩やかに蛇行して、久留米付近から支流の宝満



川と合流し背振山脈にかかって、南へ曲流を繰り返しながら有明海へと注いでゆく。

### ②御霊の祟り＝筑後川の頻繁なる洪水

支流が多く、川底は堅く、勾配は緩やかで水捌けが悪い筑後川は度々の洪水をもたらしている。国土交

通省の資料等よると、天正元年(1572年)から平成29年(2017年)までの445年間に181回の水害があり、実に2年半に1度の割合で洪水があり、甚大な被害をもたらしている。人々にとっては**御霊の祟り**としか考えようがなかったのである。

### ③久留米水天宮の始まり

水天宮草創の由来について、「水天宮神徳記」によると、壇の浦合戦後『高倉平中宮(建礼門院:平徳子)』に仕えていた『**按察使局伊勢**』が筑後の鷺野ケ原まで逃れてきて、そこで出家して『千代』と改名し『安徳帝』と『高倉平中宮(建礼門院:平徳子)』、そして『二位尼(平時子)』を供養するために祠を設けたのが始まりという。

この祠は、筑後川北岸の下野村(現:佐賀県鳥栖市下野)の鷺野ケ原であり、「尼御前社」が「下野水天宮」となり紆余曲折を経て、慶安3年(1650年)に対岸の現在地へ移ったという。



下野水天宮(鳥栖市下野町)

## 3. 水天宮のご祭神と縁起

### ①水天宮のご祭神

現在は次の4座を祀る。またこの4座と異なるご祭神の水天宮もある。

#### ●『天御中主神』

『天御中主神』は、和銅5年(712年)に献上った我国最古の歴史書「古事記」の冒頭に、く天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は『天御中主神』と記されている神であり、性別のない「独神」である。

※天地開闢に関わる神が不思議なことに、1100年代後半の実在する人物と混在しているのである。

いつから『天御中主神』が祭神となったのか・・・それは明治政府における神仏分離政策の推進によるものかあるいは2代目藩主有馬忠頼公による社地社殿が寄進され、現在の地に開基したときであろうか、いずれかが謎解きの鍵となるであろう。

#### ●『安徳天皇』

『安徳天皇』は、寿永4年(1185年)、源平合戦において、壇の浦(山口県周防)にて平家一門とともに入水された天皇であり、御年わずか8歳であった。

#### ●『高倉平中宮(建礼門院:平徳子)』

『高倉平中宮(建礼門院:平徳子)』は、平家頭領:平清盛の女子であり、母は『二位尼(平時子)』である。高倉天皇の後であり、壇の浦合戦での平家棟梁:平知盛は、同母兄にあたる。渡辺党に御髪を熊手にかけて船へ引き上げられ生け捕りにされた。

#### ●『二位尼(平時子)』

『二位尼(平時子)』は平清盛の継室であり、平宗盛、知盛、徳子を産んだ。三種の神器(神璽:勾玉:劍)を身に着け、下記の会話を最後に『安徳帝』を抱いて入水し、悲壮な最期をとげる。

『安徳帝』・・・

<尼げ、われをばいずちへ具してゆかむとするぞ>

**尼げ、私をどこへ連れていこうとするか**

『二位尼(平時子)』・・・

<浪の下にも都のさぶらうぞ>

**波の下にも都がございます**

吾妻鏡では、『按察使局伊勢』が『安徳帝』を抱いて入水したにもかかわらず生け捕りにされ、平氏方大宰少貳原田種直とともに幽閉され、その後追放されたという。

### ②水天宮の縁起

「久留米市史」によると、水天宮はもと「尼御前明神・尼御前社・尼御前宮」といったという。

寛文10年(1670年)に尼御前社の社人真木忠左衛門が書いた「書上」がある。これによると「千歳川水神・左荒五郎大明神・右安坊大明神」とある。左荒五郎大明神とは氾濫の原因となる荒魂、安坊大明神は和魂で『安徳天皇』を指すという。尼御前大明神は筑後川の支流の巨瀬川(耳納山麓の鷹取山から浮羽平野をとおり筑後川に流入)の水神(庄前神社祭神=平清盛)と夫婦中で両祭神が筑後川で逢うときに川は氾濫するという。尼御前は清盛の継室『二位尼(平時子)』となる。いつのころかこの水神が、平家一門の亡魂と考えられるようになり、次第に縁起が整えられていったことがわかる。

### ③水神=龍神=河童のルーツ

水天宮は、もともと筑後川の水神を祭祀することが起源であったことが窺い知れるが、この筑後川はまた河童伝説も多い地域でもある。

そのルーツを辿っていくと稲と農耕技術を伝えた中国・長江域の江南地方の海人(アマ)=河童であり、黒潮の流れによって琉球列島を伝い、九州西岸沿いに北上し、球磨川河口や八代海・有明海へたどり着いた江南人(呉・越)の集団であったであろう。



越人像  
(浙江省博物館蔵)



紀元 230 年(黄龍 2 年)呉が滅びてから紀元 582 年の南北朝:梁・陳時代の間の戦乱期に戦禍で海に押し出された海人(アマ)は様々な思想・文化・技術をもたらした。「めぐみの水」と「道しるべの道」に対する信仰心を持ち「水の神」・「田の神」・「天の神」として水神(河童)・海神(竜蛇)・北斗神を祀る。

水は稲をはじめ五穀豊穡の源泉であり、河童が好きな胡瓜や瓢箪は水霊を宿すという。以上

#### 参考文献

1. 久留米市史 久留米教育委員会
2. 日本の神々 谷川健一 白水社
3. 九州河童紀行 葦書房 九州河童の会
4. 平家物語四 杉本圭三郎 講談社学術文庫
5. 週刊日本の神社117(株)デアゴスティーニ・ジャパン 小河原和世
6. フリー百科事典「ウィキペディア」

## ZOOM視聴に就いて(再掲載)

2022年11月ゼミでZOOMによる視聴を開始しました。その後、会員のZOOM視聴希望がありません。改めて、ZOOM視聴要領について最掲載しますので、希望者はご利用下さい。

### 1. 概要

- ・対象：会員による講演ゼミ。
- ・実施条件：参加希望者が4人以上。ただし、ZOOMホスト(岡安会員、米野会員)の都合が悪い場合は中止となります。
- ・参加費用：ゼミ会費1千円+ZOOM費1千円=2千円

### 2. 手順

- ・前月15日頃までに齊藤 潔会員宛にメール(当ニュース標題に記載)で申込む。
  - ・ホスト会員がURL等をメールで連絡します。
  - ・前月末までに参加費を会の口座に振り込む。
  - ・ゼミ講演会員がゼミ資料をメールで送付する。
- 以上。

## ZOOMの注意事項(再掲載)

ZOOM視聴の注意事項については、下記の通りです。

### 1、視聴方法

ゼミの1週間程度前に、ZOOM ミーティングのURLをメールで送ります。

当日は、URLをクリックするか、ブラウザにコピーしてZOOMミーティングに参加して下さい。

ZOOM ミーティングは、待機室で待つことなく、自由に参加できる設定にしています。ゼミ開始の30分程度前から参加できます。

不明な点は事前にZOOMホストにご相談下さい。

### 2、注意事項

**録画、録音は固く禁止します。**

ゼミが始まったら、音声はミュートに、カメラはオフにして下さい。

質問がある場合は、音声をオンにして発言して下さい。

### 3、その他

ZOOM 視聴(接続)に不安がある場合は、テストミーティングを設定しますので、早めにZOOMホストにご相談下さい。以上。

## 次回2月3日ゼミ・テーマ

5世紀の技術革新：渡来人が伝えたもの  
—永井 輝雄会員—

以上。